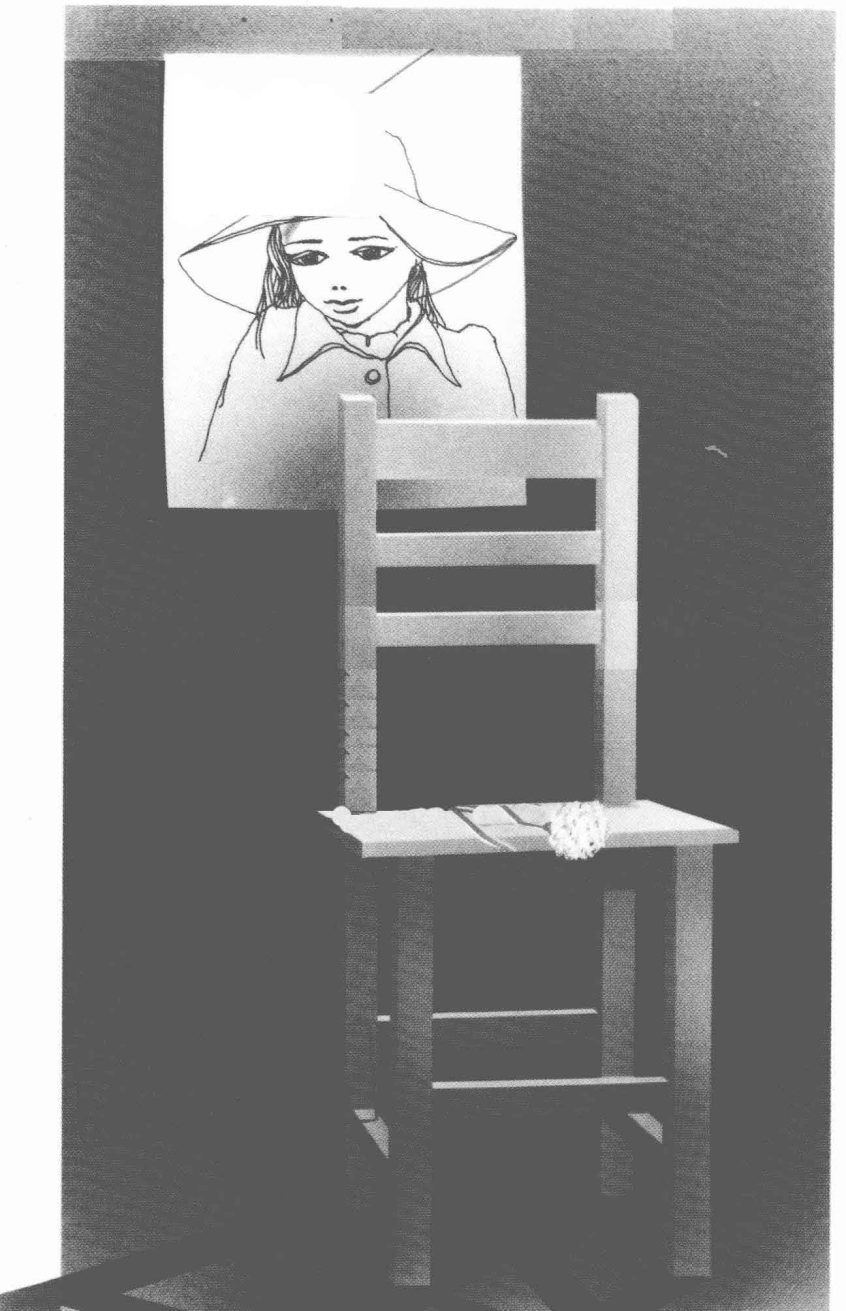
ロマン詩集

あのひと

野長瀬正夫・三国よしお／え



ロマン詩集・あのひと

かもめの本　5

1976年12月／発行©

著者／野長瀬正夫

発行所／株式会社 **金の星社**

〒 111　東京都台東区小島1丁目4—3
電話／東京03—861—1506(代表)
振替／東京 0-64678

印刷・製本／株式会社　ケイ エム エス

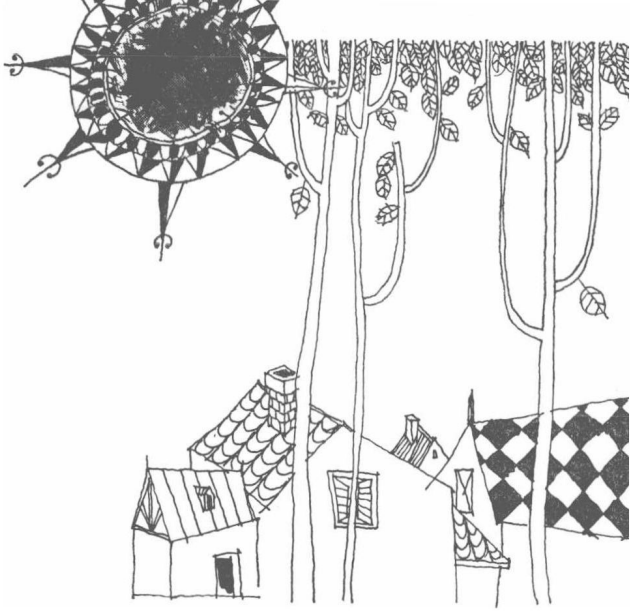
乱丁落丁本は，ご面倒ですが小社営業部宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

911　野長瀬正夫
ロマン詩集・あのひと
金の星社　1976
158 p　19cm　(かもめの本　5

基本カード記載例

8392-044051-1406

しおのみさきのとうだいの
きんのゆうひもなつかしや
こころはるかにひとをこい
ありそのまつにみをよせて
なみだながしてうたいたる
わかきひのうたあいのうた



もくじ

あのひと 7

その一 8

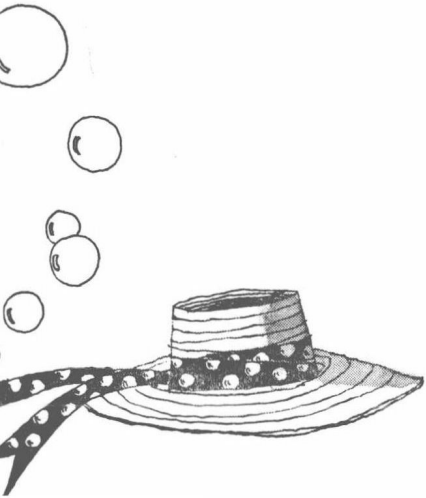
その二 11

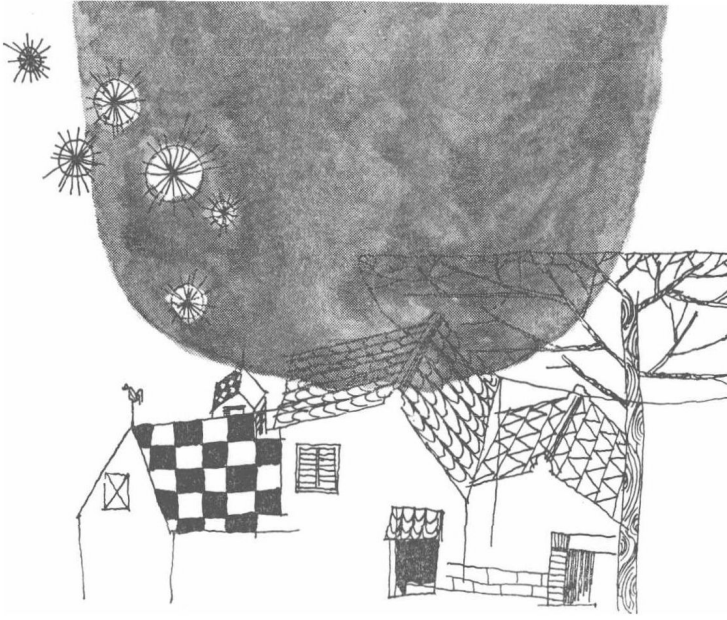
その三 14

その四 18

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

おもいで 21
タンポポ 22
おもいで 23
花の丘 24
海のわかれ 26
十九の夏 27
夜霧 28
十二月のうた 30
秋のささやき 34
ちいさな町で 37
ある日、わたしは 39
あのころは 42





湖畔物語 45

雪はふりつつ 46

紺青の日 54

湖畔の少女 60

甲斐の宿 67

早春 74

手帳から 82

廃墟で 84

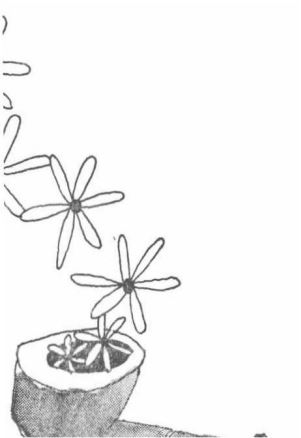
青い星 93

わが主よ、こよいも 99

花の手紙 107
第一信 108
第二信 114
第三信 120
第四信 126
第五信 129

続＝花の手紙 135
母への手紙 136
嫁ぎ先の姉への手紙 144
紀州の、とある漁村にて 150
兄への手紙 152

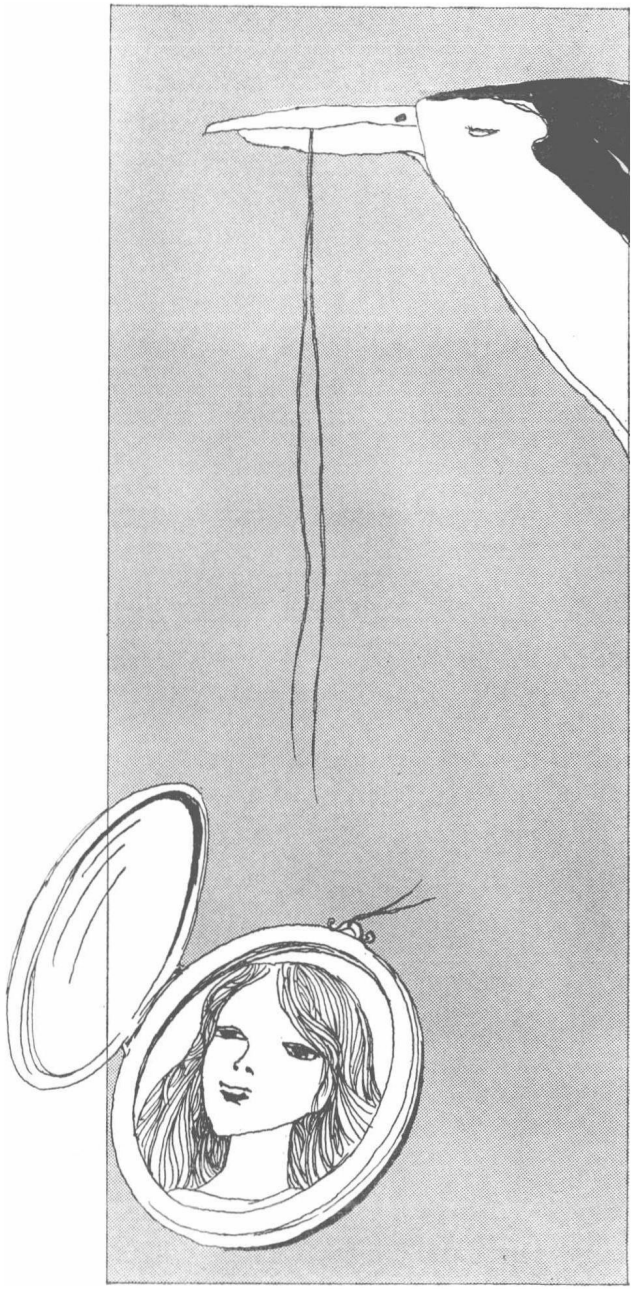
あとがき 158



そうてい・渡辺憲雄

え・三国よしお

あのひと



あのひと・その一

わたしはたった一度だけでも、
あのひとの手にふれてみたいと思っていた
あのひとのふっくらとした手に
わたしのごつい手を、そっと重ねてみたいと思っていた
そう思いながら
わたしはいつも遠くの方から
あのひとをじっとみつめていた
うわべは何事もなくよそおっていたけれど
わたしの心は、火のようにさけびつづけていた

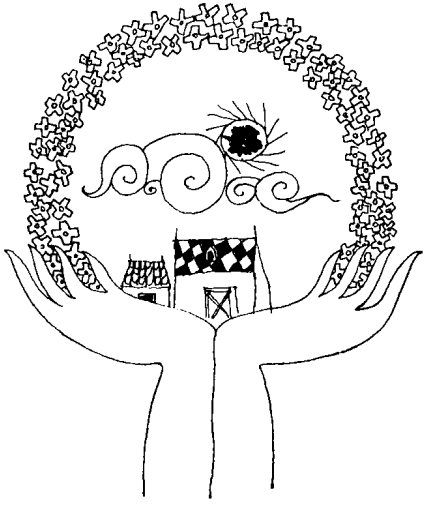
试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

わたしは愛しています、わたしは愛しています……と

やがて、あのひとは二十歳になった
あのひとはそんなに大きくなってから
わたしを困らせるような意地悪をした
あのひとがそんなにすねたのは初めてのことだった
わたしは途方にくれてしまい、
思わずあのひとの手を握った、生まれてはじめて——
あのひともわたしも
そのときはすこし昂奮していたので
おたがいの手がふれあったことを知らないほどであった
しばらくしてわたしたちは
目をそらして、そっと手をはなした
あのひとはぱっと頬を上気させて

こんなことを言った

「まあ、うつくしい空の色ですこと！」



あのひと・その二

あのひとが北へ立つ日は
霧のような雨がふっていた
わたしが、こんな雨の中を歩くのがすきだといったら
あのひとは、わたしもすきですといった
わたしはあのひとの手帳に
みじかい別れのことばを書いた
　いつ会えるともしれない
　雨の日の　北への別れ

そして、あのひとは行ってしまった
父の新しい任地(にんち)――北の国から
あのひとの、さびしいというたよりがきた
わたしも、さびしいという手紙を書いた
そんな手紙を
いくたびやりとりしたことだろう、あのひととわたしは……
やがて、わたしの住んでいる町に
屋根に雪をのせた汽車がくるころになった
わたしは駅の陸橋から身をのりだして
たったいま北の国から着いた汽車の
屋根にずっしりとつもっている、
煤煙(ばいえん)にくろずんだ雪をながめた
そして、みぞれふる官舎の窓ぎわで
さびしく「菩提樹(ぼだいじゅ)」をくちずさみながら

ひとり編み物をしているというあのひとを思いうかべた
ああ、わたしも北の国へゆこう——いや、ゆかねばならぬ
けれど、わたしは思いとどまった
わたしはこのさびしさに耐えて
何年でも待とうと思った
あのひとがかならず
わたしのもとへ帰ってくることを信じて。

あのひと・その三

これがあのひとの住んでいた家の跡なのか
これがあのひとの住んでいた家の跡なのか
あのひとは父とともに
ふたたび東京の家に帰ってきた
そして、あのひとは死んだ、四月十三日の夜

ああ、この庭先の壕の中で
あのひとは焔と煙にまかれながら
ひざもくずさず、うつぶせになり

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton